

# 風塵の群雄

デルフィニア戦記  
8

茅田砂胡

中央公論新社



### 目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

|   |                |                 |   |   |         |
|---|----------------|-----------------|---|---|---------|
| 地 | タイトルロゴ・マークデザイン | カバーデザイン         | 挿 | 口 | カバーイラスト |
| 図 | 水野デザインルーム      | しいばみつお<br>(伸童舎) | 画 | 絵 | 沖 麻実也   |
|   | 斎藤由加           |                 |   |   |         |

## 目次

|      |       |     |
|------|-------|-----|
| 1    | ————— | 9   |
| 2    | ————— | 36  |
| 3    | ————— | 51  |
| 4    | ————— | 60  |
| 5    | ————— | 77  |
| 6    | ————— | 104 |
| 7    | ————— | 125 |
| 8    | ————— | 147 |
| 9    | ————— | 171 |
| 10   | ————— | 192 |
| 11   | ————— | 221 |
| 12   | ————— | 224 |
| あとがき | ————— | 230 |



アランナ●ナシアスの妹。

ジル●タウ屈指の大頭目。イヴンを高く評価している。

マーカス●タウの頭目。

パジャン●タウの頭目。

ブルーワント●サヴォア一族の実力者。

モントン●サヴォア一族の重鎮。

ブルクス●宰相。デルフィニアの裏も表も知りつくしている。

カリン●女官長。ウォルを暗殺の危機から救った。

カーサ●サヴォア公爵家執事。

アスティン●ティレドン騎士団副団長。

ドゥルーワ●先代デルフィニア国王。

アエラ●ドゥルーワの妹。サヴォア公爵家に嫁ぐ。バルロの母。

ゾラタス●タンガ国王。

ナジェック●タンガ皇太子。

オーロン●パラスト国王。

ヴァンツァー●ファロット一族。

グライア●ロアで黒主と呼ばれていた野性の悍馬。リィの騎乗を許す。

# CAST

- ウォル（ウォル・グreek・ロウ・デルフィン）●デルフィニア国王。庶子であったため、一度はその地位を奪われるも多くの味方を得て再び王冠を被る。統率力に優れ、無私公正。戦士としても優秀。
- リィ（グリンディエタ・ラーデン）●異世界から来た少女。華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。ウォルの王権奪回に類を見ない活躍を示し、戦女神と讃えられる。後にウォルと結婚、デルフィニア王妃となる。
- バルロ●国内の名門サヴォア一族の当主で、公爵。ティレドン騎士団長。ウォルの従弟で毒舌家。ウォルのことを早くから国王と支持した。
- イヴン●独立騎兵隊長、兼親衛隊長。ウォルの幼なじみ。タウの自由民。
- ナシアス●ラモナ騎士団長。バルロの友人。
- シェラ●リィ付きの女官。実は少年。元・特殊技能集団ファロットの一員。
- ドラ●将軍。名馬の産地として名高いロアに領地を持つ伯爵。ウォルの養父フェルナン伯爵の親友だった。
- シャーミアン●ドラの嫡子。女騎士。
- ロザモンド●ベルミンスター公爵家当主。
- エンドーヴァー（ラティーナ・ペス）●子爵夫人。ウォルの元・愛妾。

大華三国図

タンガ

テルクイニア

ハラスト

アサイヨン

モサイ

河

ポエの街道

・ミンヌ

・ヒルガナ

・クラシア

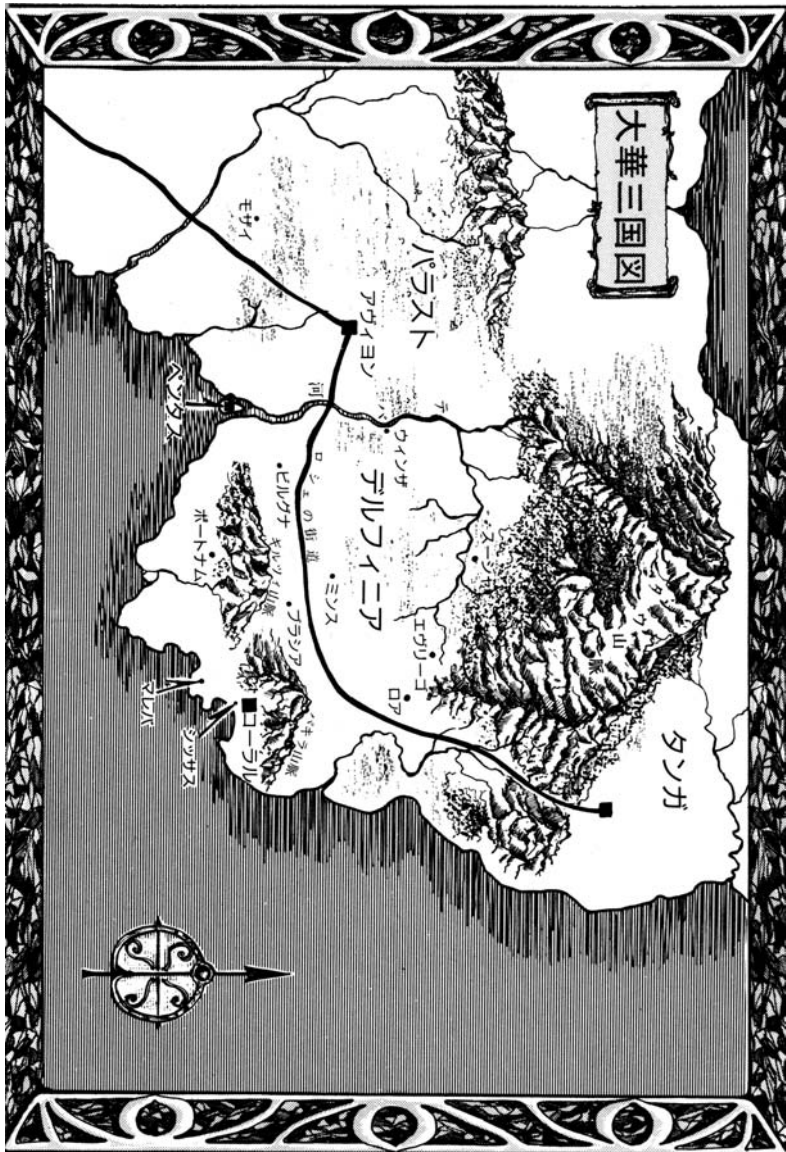
ホーナム

コーラル

シツサス

ワレバ

メダス



# 風塵の群雄

デルフィニア戦記8

*Definarian Wars*  
A RECORD OF THE

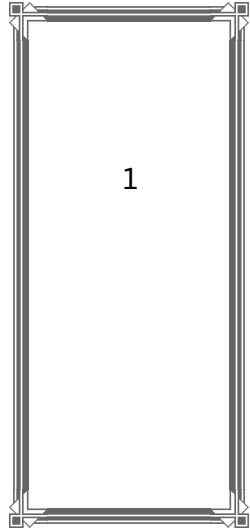




デルフィンニアとタンガが事実上の交戦状態に突入してから五日が過ぎた。

戦端となったランバー付近の住民もタンガ側の国境近辺の住民も息を潜めて成り行きを窺い、中には戦火を避けて避難する者も出てきた。

なんとと言っても中央の華と言われるほどの大国同士の戦である。地方領主同士の小競り合いとは訳が違う。恐ろしいことになったものだと言わなければならない。



身分の低い者にとって戦争は不意に襲ってくる嵐に等しい。いっどこで発生するかわからず、ひとたびその進路に飲み込まれたらいかなる抵抗も意味がない。ただ成り行きに任せ、家や田畑を失うことになっても諦めるしかない。

しかし、戦という嵐は本物のそれに比べてきわめて変則的だ。ほんの五カーティヴも進路がそれれば他人事ですむ。直撃されても二、三日で通り過ぎてしまうものなら大した被害はないのだ。

領民がもつとも恐れるのは戦況が膠着し、軍隊に長居をされることだ。居座られたらこれほど厄介な質の悪い嵐はない。長引けば長引くほど灰にされる家屋や田畑が増え、数千数万もの殺気だった人間がそこら中に陣取り、合戦のたびに死者の埋葬や負傷者の世話に駆り出されることになる。そうなったら仕事はもちろん、平穩無事な生活などどこかへ行ってしまう。

加えて今回の戦は国境線で起きたものだ。味方が

勝つて敵国に攻め込めば戦場は移動して事なきを得るが、負ければ血に飢えた敵兵がどつとなだれ込んでくる。死活問題である。

双方ともに滅多に見せない熱意をもって自国の軍隊を支援し、その勝利を願った。

最初は奇襲を成功させたタンガのほうが圧倒的に有利だった。一時はデルフイニア国境の東の要、ランバー砦とりでを陥落寸前にまで追い込んだが、デルフイニアは王と王妃の働きでその苦境をひっくり返した。

特に王妃になったばかりのグリンダ王女はタンガの総大将であるナジェック王子を捕虜にするという離れ技をやつてのけたのである。

勇者揃いで知られるタンガ軍もこれには慌てた。

デルフイニア軍はこの機を逃さず猛攻撃を掛け、ランバーまで押し寄せていたタンガ軍を国境まで押し戻した。タンガは逆に国境を越えて進入してくるデルフイニア軍を迎え撃たなければならなくなった

のである。

主将を捕らえられた状態で猛追を食らったのでは持ちこたえられるはずがない。普通ならそのまま総崩れになるところだが、今回ばかりは違った。

ゾラタス王の率いる一万もの軍勢が国境を目指して進軍中の情報が入ったのである。

先手敗北の知らせにはゾラタスもさすがに驚いたらしい。負けるはずのない戦力を送り込んだはずだからである。

しかし、息子が捕虜になったことを聞いても、この父親は顔色一つ変えなかった。それどころか動揺する部将たちを逆に叱りとばした。

今ここで手を引けばナジェック王子はとられ損である。自分が捕虜にされたことで味方の大敗北を招いたと知れば、王子は恐らく生きてはいまい。

次期国王にそんな辱はずかしめを与えぬためにも、その王子の身柄を無事に取り戻すためにも、ランバーに駐留しているデルフイニア軍を叩き潰さねばならぬ

とタンガ国王は激しい決意を示し、さらなる攻撃を命じたのである。

その勅命と強力な援軍の到着に、潰走寸前だったタンガ軍は完全に立ち直った。

デルフィンニアはランバー砦を、タンガはこの辺り一帯の領主の城を拠点にして睨み合う形になった。

双方ともに国王を将とした必勝の態勢である。

戦闘は膠着状態に陥った。

「だめだな、これは」

と、デルフィンニア国王は居並ぶ諸将を前にして、肩をすくめた。

「連中、捕らえられた王子のことはまるで眼中にない。せっかくの人質も敵がいらんと言うのでは話にならない。処分を考えたい方がいい」

その場にいた武將たちは少しばかりどよめいて、王妃になったばかりのグリーンデイエタに眼をやった。

今の王妃は小荷駄が到着すると同時に窮屈な花嫁衣装を脱ぎ捨て、あり合わせの麻服を纏っている。

知らない者が見たら従者と間違われても仕方がないような姿だったが、額に置いた銀環と腰に差した見事な造りの剣は、どんな装飾品よりもこの人の姿を引き立てている。

どうしてその場の視線が集まったかと言えば、王子を捕らえたのがこの人だからだ。

戦場での働きは手柄として評価される。それは一兵卒も部将も変わらない。

敵の主将を捕虜にしたとなれば文句なしの大手柄である。最大の功労と言ってもいい。

武勇を讃えられ、重く賞されてしかるべきなのに、その手柄をふいにされたら、これは武名を重んじる者にとって非常な衝撃であり、屈辱である。

まして王妃は気性の激しいことで知られている。

武將の一人はその心中を慮ってか、こんなことを言った。

「おそれながら、今一度、王子の身柄と引き替えに降伏するよう、もしくは兵力を削減するよう、勧告

「してみてもいいかがでしょうか」

「それで言いなりになるような可愛らしい父親とはとても思えんぞ」

「しかし、せっかく妃殿下が捕らえてくださいましたものを……」

その妃殿下は国王そっくりの仕草で肩をすくめた。「ウォルの言うとおりだ。もともと敵を混乱させるのが目的で捕まえたようなものだからな。その敵はゾラタスの一喝で混乱から立ち直り、攻撃をやめる気配もないとなれば、置いといても仕方がない」

「うむ。お前にはすまぬと思うが……」

「そんなことは気にしないでもいい。お前が大将だ。それで？ どう処分する？」

これに関しても部将の間からは処刑すべきであるとの意見が出た。タンガは人質をいっさい無視して委細かまわず攻撃を繰り返しているのである。見せしめとして示すべきだというのだが、国王は領かず、いたずらっぽく王妃を見た。

「どう思う？」

若い王妃は可愛らしく首を傾げた。

「いらぬものを片づけるのにそんなに手間をかけるのもばかばかしいんじゃないか？」

「まさにしかりだ。王位継承者となるとその遺体も丁重に送り返さねばならぬ。そこでだ。俺としては、お前さえ許してくれるのなら、今のうちに捨ててしまいたい」

武将達は眼を剥いたが、王妃は真顔で答えた。「それが妥当なところだろうな」

二日後の夜、タンガの王子ナジエック・ユンクが捕らえられていたランバー砦を脱出した。

王子は捕らえられてからずっと砦内の一室に監禁されていた。敵国とはいえ、一国の王子を地下の牢獄に入れるわけにもいかず、一応は客人の扱いとしたのである。

しかし、若さと自信と猛々しい精気に満ち溢れているナジェック王子である。おとなしく客人でいてくれるわけがない。デルフイニア側もそれを警戒し、厳しい監視下に置いていた。

じりじりしながら脱出の機会を狙っていた王子はこの夜、密やかな声で起こされた。

「もし、もし……殿下、お目覚めください」

声と同時に王子はむくりと身を起こしていた。

「何者か？」

「陛下の思召しにより参上つかまつりました」

密やかではあるが緊迫した声である。

すでに真夜中だ。王子が閉じこめられているこの部屋は砦の離れにあたる。一般の兵士があまり近づかないようにという配慮だが、もちろん昼夜を問わず厳重な見張りがついているはずだった。

しかし、扉の外にうずくまっているらしい人影は一人のようだ。見張りがこれを咎める気配もない。

「見張りには金銭をつかませて遠ざけておきました。

今のうちでございませ。さ、お逃げ下されませ」

囁くような声と同時に鉦びょうの打たれている重い扉が少し開いた。

王子はすかさず行動を起こした。暗い廊下に出てみると、そこに黒い覆面を被った小さな人影がうずくまっていた。

歳の頃がよくわからない。頭より高く掲げた両手に王子の大剣を乗せている。

その姿勢のまま、かすれた声でさらに言う。

「かような風体で御前に現れますこと、平にご容赦ください。私、外までご案内申し上げます」

「む……」

尊大な仕草で剣を腰に差し込むと、王子はすんなりと謎の人物の後ろについて歩き出した。一国の後継者の誇りはこんな時でも健在である。

何よりタンガ軍が自分の奪回にこのような手段を用いてくることは大いにありそうなことだし、父、ゾラタスが激しい人であると同時に恐ろしく知恵の

回る人であることもよく承知している。

恐らくは何年も前からこうした者を密かに敵方に送り込んでいたのだらうと思つた。

その曲者は敵兵で溢れている砦の中を楽々と移動して、実に巧みに王子を北側の小さな戸口まで案内した。

やはり、見張りはいいない。

「手はずは整えておきました。ここを出てしばらく行きますと右手に茂みがございます。この季節でも葉をつけている大木が一本だけ立っておりまして、それが目印になりましょう。馬をつないでおきましたから、馬と共に川を渡つてお逃げ下されませ」

「言われぬでもわかつておるわ」

王子はむしろ傲然と言ひ、それでも慎重に辺りに気を配つて砦から滑り出た。

脱出の手引きをしてくれた人影にはねぎらいの言葉一つかけず、名前も尋ねなかつた。身分の卑しい者が高貴な人のために働くのは当然のことだからで

ある。

感謝するどころか、王子は苛立ちと憤りを感じていた。

一国の王子たる自分がこんな下卑た者の力を借りて自由を得るとは何とも情けない限りではないか。

誇りと名誉を何より重んじ、恥辱を何よりも忌み嫌うナジェック王子は、いっそ、この怪しい人物を切り捨ててしまおうかとも考えた。この先、王子の醜態を決して口外できないように、である。

しかし、これが父の手の者であるとするなら、勝手にそんなことをしたら自分の命がない。理不尽な怒りを覚えてはいたが、敵方に深く潜入して働いている者はタンガにとつて貴重であると考えただけの分別は残っていた。

舌打ちしながらも後を振り返らずに砦を離れた。

茂みの中の馬はすぐに見つかつた。苦戦続きのタンガ軍は今はかなり後退し、ランバー砦から離れている。濡れた体で夜通し歩かずにすむようにという

心遣いなのだろうか、とてもとてもそこまで考えを巡らすことのできる王子ではなかった。

一刻も早く本隊に合流したい一心で馬の口を取り、ランバー砦をぐるりと囲んでいる川にざんぶと身を躍らせた。

相当に深く、流れも速い川だ。王子は全身びしょぬれになり、馬はなかなかまっすぐは進めない。

三月とはいえ、この地方にはまだ雪も残っている。水のように冷たい水だったが、王子はいっこうに気にしなかった。だいぶ流されながらもどうにか川を渡って対岸にたどり着いた。

ランバー砦の明かりはここからでもよく見える。規定の見張りも出ているようだが異常に気付いた様子は無い。

凍えそうになっていた王子の顔に初めて笑いが浮かんで来た。

明日の朝、自分の脱出を知ったとき、あの砦がどんな騒ぎになるか、怪しげな術を使って自分を負か

した、娘と言ってもいいような若い王妃がどんな顔になるか、想像するだに愉快だった。

「阿呆どもめ」

間抜けな見張りに嘲笑を浴びせて、ナジェック王子は馬の首を返して駆け去ったのである。

戦闘意欲こそ失ってはいないものの、初戦で痛い敗北を喫したタンガは、用心のため、国境から十二カーティヴも離れた場所に本陣を布しいていた。

単身駆け戻ったナジェック王子を見て、兵士達が驚いたのはもちろんである。皆、若い主君の武勇を褒ほめ称たえ、王子も得意満面で答えてみせた。

「デルフイニアの牢獄など俺にかかれればこの通りよ。間抜けな奴どもだ。せつかく捕らえた敵の将をむざむざ逃がして気付きもせんのだから、呆れてものも言えん。こうして俺が戻ったからにはあんな腰抜けどもに大きな顔はさせておかぬぞ」

口々にお見事と賞賛され、そっくり返ってみせた王子だが、さすがに父王の下もとに出向いたときはいく

ぶん神妙な顔つきになっていた。

ケイファードを出発するとき、ナジェック王子は必ずランバーを陥落させると命じられた。それだけの軍勢も持たせてもらい、前もつての工作も効果を上げていた。

戦に絶対はない。が、ここまでお膳立てを調べているながらランバー攻略に失敗したとなれば、責任を追及されずにはすまない。

緊張の面もちで帰還の報告をし、失敗の原因を報告した。王子にはあの王妃が何か怪しげな術を使って自分を陥れたとしか思えなかつたので、そのことを熱心に訴えた。

ゾラタス王は終始無言で息子の弁を聞いていたが、王子が語り終えると、表情一つ変えずに言った。

「そちはなぜ、生きて戻ることができたと思うか」

「はっ。デルフィニアの者どもは将士ともに腰抜けであります。陣中とも思えぬ油断しきつた有様にて楽々と抜け出せました」

峻烈しゅんれつで知られるタンガ国王は呆れたような笑いを薄く整った唇に浮かべた。

「たわけ」

「は？」

「日暮れ前にデルフィニアからの使いが参つたわ。たいせつなご息をお返しますので、お迎えをさしのべられませと、小面憎くぬかしおつた。ご丁寧にもそちには、お風邪など召しませぬようにという見舞いの言葉まで添えてだ」

呆気にとられた王子である。

「あの若僧め……いや、もしかしたらあの小娘の差し金か。見事にこのわしを手玉に取りおつた」

ぼかんとしている息子とは逆に父王は冷ややかな気配を纏っている。

「わしはな、今日までそちの身柄を取りもどすあらゆる交渉を拒否していた。それで奴らがそちを処刑でもすればしめたものと思っていた。兵士の士気は大いに向上し、我々には極悪非道の敵を倒すまたと



ない好機が与えられる。そちにはこの上ない名譽ある死が与えられる。これぞ万事めでたしというものだ。そうは思わぬか？」

人身御供ごくうにするつもりでいた息子を前にして平然と言つてのける。これがタンガ国王の怖さだった。

「ところが奴らはそちの命が役に立たないとわかるやいなや、あっさり返してよこしたのだ。尋常の方法ではなく、手の込んだ手段を使つてな。どうだ。生き恥をさらしに戻つてきたことが飲み込めたか」

言われるまでもない。ナジェック王子は血の氣の失せた顔でわなわな震えていた。

では、味方と信じていたあの謎の人物は実は敵の手の者だったのか。

何も氣付かぬうつけ者と砦の敵をあざ笑つていた時、奴らはまんまと騙された自分を笑つていたのか。ナジェック王子にとつてこれ以上の屈辱はなかった。体中の血が煮えるかと思うようだった。

憎悪に顔を歪ませて、王子は憤然と叫んだ。

「父上。何とぞ、出撃の許可をお与えください！」  
「ならぬ。そちは後方へ退き、ケイファードと本隊との連絡に務めよ」

「それは——それは、得心が参りません！ 騎士たる者かような恥辱を受けたからにはおのれの手で拭わねばなりません!! 是非とも一軍をお与えください。お許しさえいただければ今度こそ敵の息の根を止めてご覧に入れます!!」

「たわけ!!」

ゾラタスはかつと眼を見開いて息子を睨み据えた。  
「貴様、その頭は何のためについておる!? 奴らが逃亡を手助けする形で貴様を放免したことをなんと見ておる! 今、貴様を前線に戻せば、三度までもあの若僧にしてやられることになるわ!」

「……」

「敵に情けを掛けられた。この汚辱は自分の手で拭わねば面目が立たぬ。奴らは貴様がその心理になることまでを見越している。逆上した貴様がどんな暴

挙に及ぶか、どんなばかげた采配を揮って我が軍を壊滅的な危機に陥れるか、眼に見えるようだわ！ タンガの軍勢は貴様の体面を施すためにあるのではない。誇りとやらを重んじるならばこれ以上の恥をさらさぬ内に後方へ退けい!!」

その凄まじい眼光に貫かれた王子は身動きすることもできなかつた。金縛りにあつたように竦み上がった。

そして、たつた今の激昂が嘘のように静まり返つたゾラタス王はゆつくりと言つたのだ。

「先手を率いる大将の身でありながら軽率にも敵に一騎打ちを仕掛けたことは許してやる。だが、同じ過ちは二度は許さん。このこと、しかと肝に銘じておけよ」

ゾラタスはナジェック王子の外にも四人の男子を儲けている。

うち二人は正妻の子、二人は妾腹の子だ。

妾腹の子は論外としても、あまり役に立たないよ

うなら廃嫡も覚悟せよと言っているのである。

憎悪に赤黒く染まっていた王子の顔が恐怖のために蒼白になった。

強情で自信家のナジェック王子だが、この父親の怖さは骨身にしみて知っている。無能となれば我が子だろうと冷然と切り捨てる人だ。

総身にじつとりと冷や汗をにじませ、ほうほうの体で引き下がったが、胸のうちには激しい怒りと憎悪が渦巻いていた。

そんな王子を氣遣つて家来達がいろいろと慰めの言葉をかけたが、耳に入るはずがない。

「俺に……この俺に情けをかけたのか、小娘!!」  
呪詛の叫びだった。

父王への恐怖心も屈辱をはらす機会を奪われた恨みも、デルフィニアの庶子王と成り上がるの王妃に対する憎悪にすり替えられた。あの二人が今頃どんな顔で自分を嘲笑っているかを思うといつてもたつてもいられなくなる。

「今に見ておれ。この仇はきつと取るぞ。俺を見くびつたことを泣いて後悔させてやる!!」

これ以後、ナジェック王子は父王の命令に従い、しばらく戦の表舞台から身を引くことになる。

その分、デルフィンニア国王と王妃への恨みがいかに深く激しいものになっていったかは想像に難くない。しかし、それはまた別の話だ。

その王子を砦から逃がしてやったシエラは安堵の息を吐いて、ことの次第を報告に国王と王妃の前にまかり出た。

深夜を回る時間だが、二人とも戦装束に身を包んだままシエラを出迎えた。

結婚式が済まないうちに戦争が始まり、あわただしく飛び出してきた二人である。新婚らしい時間を過ごす間もなくお気の毒に、と、そんな考えがふと浮かんで、思わず苦笑した。

大きな緑の瞳が不思議そうに瞬きする。

「どうした?」

「いえ、別に……」

「何でもないって顔じゃあないぞ?」

猫のように可愛らしく、女豹めひょうのように物騒な顔に迫られて、シエラは苦笑しながら弁解した。

「本当に何でも……、またあなたを怒らせるようなことを考えた自分がおかしかっただけです」

「ま、呑め。体が冷えただろう」

国王が手ずから美酒を勧めてくれるのをシエラは恐縮して受けた。

ナジェック王子を逃がした手際とその後の様子を詳しく報告し、最後にためらいながら付け加えた。

「ご命令通りにいたしました……、本当にあれでよかったですでしょうか」

『陛下』の（正確には妃殿下の）とんだ『思し召し』で敵の主将を逃がしたわけだが、それ自体はうまくつとめたつもりだ。

顔を隠し、服を調節して体型をごまかし、声色を使えば、誰も元のシエラを想像することはできなく

なる。王子は自分を逃がした者が十六の少年とは夢にも思っていないはずだ。

王妃が首を傾げた。

「あれを逃がしたことが不満なのか？」

シエラは首を振った。そんなことはない。それは自分の考えることではない。ただ、間近に接した王子のとなりが気にかかるのである。

「あの方は私を斬り伏せようとなさいました」

国王は眉をつり上げ、王妃は顔をしかめた。

「礼を言うならともかく、何で斬ろうとする？」

「殺してしまえばよけいなことはしゃべれなくなりますから。敵中から逃れるのに私のような者の手を借りたとあつては自尊心に傷がつくのでしょう」

王妃はますます顔をしかめ、国王はおもしろそうな顔になった。

「少し話ただけにしては詳しいな？」

シエラは黙って頷いた。

ああいう人間のことならよく知っている。

傲慢で、尊大で、自分の生まれや身分に絶対の自信と自負を抱いている。度の過ぎた矜持きんぢを異常なまでに重んじ、これを侵害されたときの怒りも執念深さも常人の理解を遥かに超えるものがある。

人質として使えないにしても、どうしてあのまま閉じこめて置かなかつたのかと思つた。国王も王妃もたちの悪い敵をわざわざ自分の手でこしらえたような気がするのだ。

「陛下は、誇りを傷つけられた王子が再び指揮を執れば、必ず冷静さを欠き、大失態を演ずるに違いないとおっしゃいましたが……」

「あれは口実だ」

国王は苦笑しながら言つた。

「そうしてくればありがたいのだが、ゾラタスは何れほど愚かな国王ではない。今後、全軍の指揮は自分で執る。少なくとも王子には任せんだろう」

不思議そうな顔になったシエラである。それでは本当にただの逃げられ損だ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。